

# 恋人の存在が成功回避動機に及ぼす影響の検討 —中学・高校生を対象に—

## Motives for Success Avoidance Based on Having a Romantic Relationship in Junior High and High School Students

五反田 稚子  
跡見学園女子大学大学院  
人文科学研究科臨床心理学専攻  
Wakako Gotanda  
Division of Clinical Psychology,  
Graduate School of Humanities, Atomi University

宮崎 圭子  
跡見学園女子大学  
Keiko Miyazaki  
Atomi University

### 要 約

本研究の目的は、青年期前期での「成功回避」がどのように現れるかの検討と性差についての検討であった。調査対象者はX中学校・高等学校計73名(中学校：男子20名，女子21名，高等学校：男子21名，女子11名)である。質問紙は，作成した未完成の刺激文(「昇進・転勤」と「恋人の存在」という条件を含む)が記載されている。刺激文において恋人の存在が記述されていないものを「恋人無し群」，記述されているものを「恋人有り群」とし，それぞれ男子版と女子版の4種類を作成した。調査対象者は未完成の刺激文を読んで，物語を完成させる。その完成した物語を「成功回避をしている」，「成功回避をしていない」，「どちらともいえない」の3群に評定分類した。その評定結果を $\chi^2$ 検定により検討した。恋人無しの条件では，10%水準で有意傾向にあるものの，女子の方が成功回避をし，男子の方が成功回避をしていない傾向があることが明らかとなった。恋人有りの条件では，成功回避の有無，性差ともに有意ではなかった。以上の結果を鑑み，共学・進学校の条件について考察した。

【Key Words】成功回避動機，青年期前期，性差

### I 問題と目的

「成功回避動機」とは，1960年代後半から1970年代にかけてアメリカで提唱された概念である。Horner(1972)は「成功恐怖」という概念に基づき，下記のような研究を行い，女性の成功に対する恐怖心を報告した。「一学期が終了したとき，ジョン(アン)

は医学部で一番になっていることを知った」(男子回答者にはジョン版，女子回答者にはアン版)という短い刺激文を示し，その人物像，成育歴，将来の生活の予想等を回答させた。その結果，主人公が男性のジョンの場合，男子学生の記述はこれまでの努力を評価し，肯定的な将来を確信した回答が90.1%であった。それに対し，主人

公がアンの場合、65%の女子学生が否定的で悲観的な物語を作成していた。この結果から「女性が優秀な成績をとったり、社会的な成功を手にするのは、世間ではあまり評価されない。むしろ女らしくない人として疎まれる傾向がある。」と結論づけた。女性が成功を望むことと同時に、一方では社会的なジェンダー役割という価値観により社会的に拒絶されるのではないかという恐れを抱く。これにより不安が喚起され、成功を恐れる“両面価値”が生じるとされている。また、Horner(1969)は、社会的成功を恐れる女性に特有の動機として成功回避動機(Fear of Success)という概念を提唱した。

岡本(1999)は、対人場面の違いは男女の成功恐怖の出現に影響を及ぼすのか、男女で成功恐怖の性質は異なるか、役割期待の認知と成功者イメージは男女の成功恐怖の出現に影響を及ぼすかの3つを検討し、成功恐怖の構造について考察することを目的として、以下のような研究を報告している。対人的懸念の側面は、成功にしばしば付随する心性として理解されているが、特に親密な他者の存在が成功恐怖にいかに影響を及ぼすかといった研究はなされていないと指摘したうえで、大学生302名に対し、質問紙調査を実施した。その結果、男性は親友や恋人等、自分と親密な相手を負かして成功した場合に成功恐怖を抱く者が多いこと、女性は親密な他者、特に恋人といった異性の親密な人物を負かした場合に成功恐怖を抱くものが多いことが示唆された。さらに、成功恐怖ありと判定された自由記述のうち周囲の同性・異性の反応として否定的なことを予想しているものを個別に取

り出し、先と同様の方法で分析した。その結果、同性の否定的反応の予想には量的にも内容的にも性差や場面差は見られなかった。しかし、異性の否定的反応の予想については女性の方が男性より強く、女性が成功すること自体が快く思われないという予想が女性の記述の大半を占めていた。また、成功恐怖ありと判定された記述について検討した結果、女性には成功による対人関係の悪化についての不安である「対人的懸念」のみが見られた。しかし、男性には対人的懸念に加え、将来における失敗を予想する「失敗恐怖」が見られた。男性の役割期待と成功者イメージとが同じ性質のものであることから、「男性＝成功」という意識が男性被験者に根付いていると見なすことができ、成功しても次に失敗するのではないかと悩む心性が男性にのみ働く理由も導き出せる。つまり、男性にとって成功は「して当然するべきもの」であり期待には応えねばならないという思いを抱いている。しかし、成功後であっても次のステップに対する更なる期待が向けられ、この期待や社会的通念を重荷に感じ、成功を喜ぶ代わりに不安やプレッシャーを感じるとされている。また、成功恐怖と性役割観との関連性については「男性だから成功しなければならない、また、成功し続けなければならない」という思いが強すぎるゆえに、成功に対して圧迫感を覚え、不安や無力感に陥ってしまう、という心性の存在が認められると考察している。

このことから岡本(1999)は、成功恐怖は対人関係・文化等の社会的要因が本人のパーソナリティといった個人的要因と密接に関わって生じるものであると考えた。成

功恐怖出現率は女性>男性，男性は恋人場面>他人場面，親友場面>他人場面であり，女性は恋人場面>親友場面・他者場面という結果から，成功恐怖の量的・質的性差の存在が推測される。女性の成功恐怖は他人から否定的感情を抱かれることへの懸念である対人的懸念が中心であり，直接的に関係の無い異性に対してもこの懸念が生じると考えられた。また，男性は大切な相手より成功することに対して対人的懸念を抱く。しかし，失敗を予想する「失敗恐怖」が見られ，成功恐怖の反対行動が引き起こされることが示唆されている。

新井(2011)は、「女性は本当に成功回避しているのか？」という点および「成功回避」には成功恐怖によるものと，他の理由によるものとの2種類があることを明らかにすることを目的として，女子大学生55名を対象に質問調査を行い，刺激文をもとにショートストーリーを完成させた。その結果，全てにわたって転勤(主任に昇格)を選択した群が過半数を占めることが実証され，現代の女子大学生においては，成功回避があまりみられないことが明らかとなった。自己の行動の決定に関する規定要因の分析において，「成功」を純粹に恐怖として回避した者は1名であり，成功回避した者は，「恋人」「家庭」「現在の職場の環境」等を選択しており，別の成功(仕事や昇進以外)を手に入れていると考えられる。つまり，「成功」の定義(何をもって成功と呼ぶのか)が違ったということである。また，大半の女子大学生は成功回避をしていないという結果から，ジェンダー・アイデンティティの概念は，薄れつつある傾向が示されているともいえるのではないだろうか

と考察されている。したがって，現代の女子大学生の大半が成功回避を行わず，成功を手に入れることを選択していることがみられた。さらに，成功回避をした者は別の成功を手に入れ，成功を恐怖として考える者は少ないことが考えられるとも論じられている。

以上を概観すると，「成功回避」についての研究の大半が大学生からすでに働いている女性が主な対象となっている。青年期前期の女子も成功回避傾向があると思われる。また，同じ青年期前期の男子は「成功回避」をしていないと推察される。

以上より，本研究の目的は，青年期前期の中学生および高校生の男女に，「成功回避」がどのように出現するのかの検討と，その性差を明らかにすることであった。

## II 方法

1. 調査対象：X中学校・高等学校に通う平均年齢14.67歳(SD1.49)の計73名(中学校：男子20名，女子21名，高等学校：男子21名，女子11名)を調査対象とした。
2. 調査期間：2019年9月初旬～2019年9月下旬に実施した。
3. 調査方法：X中学校・高等学校の授業にて一斉配布一斉回収にて行った。
4. 調査内容
  - 1) フェイスシート：年齢・学年，クラス，性別，兄弟・姉妹の有無について記入を求めた。
  - 2) 刺激文：新井(2011)の刺激文を参考に，「昇進・転勤」と「恋人の存在」という条件を含めた以下のような刺激文を作成した。  
「以下の文章を読み，あなたが主人公に

なりきり、物語を完成させてください。できるだけ、詳しくお書きください。(主人公がどのように考え、どのように感じ、その結果どうするのか、詳しくお書きください。)」と教示し、自由記述式で続きの文章を完成してもらった。刺激文において恋人の存在が記述されていないものを「恋人無し群」、記述されているものを「恋人有り群」と呼称した。表1に刺激文1「恋人無し群」男子生徒版、表2に刺激文2「恋人有り群」男子生徒版、表3に刺激文1「恋人無し群」女子生徒版、表4に刺激文2「恋人有り群」女子生徒版を示す。

男子・女子各群に対して、「恋人無し群」

表1 刺激文1「恋人無し群」男子生徒版の物

あなたは会社に入社してから9年が経とうとしています。今や課長となり、大きな仕事も任されています。

ある日、あなたは鈴木部長から呼ばれました。『何だろうか。』と不安に思いながら会議室に入りました。部長はにこやかにほほ笑いながら、「君に東京の本社へ行ってもらいたいのだが…」と告げられました。

(この続きからお書きください)

版、「恋人有り群」版がランダムに配布された。

### 3) 刺激文における自由記述回答文の評定方法

得られた自由記述回答を、臨床心理学に関係のない一般男性(26歳)と一般女性(52歳)と筆者の3人で評定を行った。「成功回避をしている」場合を「1」、「成功回避をしていない」場合を「2」、「どちらともいえない」場合を「3」とし、得られたショートストーリーを読み評定を行い、2人以上が合致した数値を結果とした。

表2 刺激文2「恋人有り群」男子生徒版の物語

あなたは会社に入社してから9年が経とうとしています。今や課長となり、大きな仕事も任されています。

また、あなたには結婚を約束した恋人がいます。ある日、あなたは鈴木部長から呼ばれました。『何だろうか。』と不安に思いながら会議室に入りました。部長はにこやかにほほ笑いながら、「君に東京の本社へ行ってもらいたいのだが…」と告げられました。

(この続きからお書きください)

表3 刺激文1「恋人無し群」女子生徒版の物語

あなたは今、東京本社で小さな仕事を任されています。成績も上がり、仕事が面白くなってきています。

ある日、あなたは鈴木部長から呼ばれました。『何だろうか?』とちょっと不安に思いながら会議室に入りました。部長はにこやかにほほ笑いながら、「君を北海道支社の企画課の主任にしたいと思っているのだが…」と告げられました。

(この続きからお書きください)

表4 刺激文2「恋人有り群」女子生徒版の物語

あなたは今、東京本社で小さな仕事を任されています。成績も上がり、仕事が面白くなってきています。

また、あなたには結婚を約束した恋人がいます。ある日、あなたは鈴木部長から呼ばれました。『何だろうか?』とちょっと不安に思いながら会議室に入りました。部長はにこやかにほほ笑いながら、「君を北海道支社の企画課の主任にしたいと思っているのだが…」と告げられました。

(この続きからお書きください)

### Ⅲ 結果

「恋人無し群」と「恋人有り群」全体で73名分の自由記述による回答が得られ、収集された自由記述回答を評定者3名で内容の評定を行った。以下に、評定された回答人数による比較および $\chi^2$ 検定の結果を表5と表6に示す。

#### 1. 回答人数による性差の比較

##### 1) 恋人無し群

恋人無し群において成功回避をしている男子生徒が5人、成功回避をしている女子生徒が9人となった。

#### 2) 恋人有り群

恋人有り群において成功回避をしている男子生徒が19人、成功回避をしている女子生徒が15人となった。また、男女での比較では成功回避をしている人数は34人、成功回避をしていない人数は33人となり、僅差であることが明らかになった。

#### 2. 2変量の $\chi^2$ 検定による分析結果

##### 1) 恋人無し群

恋人無し群において、成功回避の有無、性別の2変量の $\chi^2$ 検定を行った(表5)。

その結果、恋人無しの条件では、有意傾向であるものの、女子の方が成功回避を

表5 恋人無し群における2変量の $\chi^2$ 乗検定結果

|         | 成功回避をしている | 成功回避をしていない | 合計      |
|---------|-----------|------------|---------|
| 度数      | 9         | 23         | 32      |
| 女 総和の%  | 12.30%    | 31.50%     | 43.80%  |
| 調整済み残差  | 1.7       | -1.7       |         |
| 度数      | 5         | 36         | 41      |
| 男 総和の%  | 6.80%     | 49.30%     | 56.20%  |
| 調整済み残差  | -1.7      | 1.7        |         |
| 合計 度数   | 14        | 59         | 73      |
| 合計 総和の% | 19.20%    | 80.80%     | 100.00% |

$\chi^2 = 2.94^\dagger$  自由度1 ( $\dagger : p < .1$ )

表6 恋人有り群における2変量の $\chi^2$ 乗検定結果

|         | 成功回避をしている | 成功回避をしていない | どちらとも<br>いえない | 合計      |
|---------|-----------|------------|---------------|---------|
| 度数      | 9         | 23         | 3             | 32      |
| 女 総和の%  | 12.30%    | 31.50%     | 4.10%         | 43.80%  |
| 調整済み残差  | 1.7       | -1.7       | 0.3           |         |
| 度数      | 5         | 36         | 3             | 41      |
| 男 総和の%  | 6.80%     | 49.30%     | 4.10%         | 56.20%  |
| 調整済み残差  | -1.7      | 1.7        | -0.3          |         |
| 合計 度数   | 34        | 33         | 6             | 73      |
| 合計 総和の% | 46.60%    | 45.20%     | 8.20%         | 100.00% |

$\chi^2 = 0.12$  n.s. 自由度2

し、男子の方が成功回避をしていない傾向がある事が明らかとなった( $\chi^2=2.94^\dagger$ ,  $df=1$ ,  $\dagger: p < .1$ )。

## 2) 恋人有り群

恋人有り群において、成功回避の有無、性別の2変量の $\chi^2$ 検定を行った(表6)。

その結果、恋人有りの条件では、成功回避の有無、性差ともに有意ではなかった( $\chi^2=0.12$ ,  $df=2$ , n.s.)。

## IV 考察と今後の課題

本研究の結果から、中学生・高校生は、恋人がいない場合、女子の方が成功回避をする傾向にあり、男子の方が成功回避をしていない傾向が示唆された。新井(2011)は、女子大学の学生は、恋人の有無に関わらず、日本の女子大生は成功を回避しないという結果を報告している。日本の青年期前期女子は、女子大学生と比較して成功恐怖が強いと考えられる。田坂(2002)によると、共学の学校に通っている女子生徒は異性からみられる自己に注目し、女性性を重要とすると報告している。このことから、異性がいる環境なのか同性のみの環境なのかによって成功恐怖の強さが変化する可能性がある。この検討は今後の課題である。また、以前から伝統的男性役割が指摘されている。渡邊(2017)によると、「男性は社会的に成功を修めることが重要である」という項目が最も値が高くなっており、伝統的役割態度は女性よりも男性の方が有していることが明らかになっている。柴田(2018)によると、「女性は仕事の責任を回避しがちである」とされており、女性は社会的な成功回避をしていることが明らかになった。本研究は、これらの知見と整合す

る結果となった。しかしながら、上記の研究結果とは異なる報告もある。新井(2011)は女子大学生は成功を回避しないという結果を報告しており、また、篠崎(2015)は、女子大学生は家庭を持ちながら仕事を続けていくという志向をもっていると報告している。これらの違いは、大学受験という要素の影響によるものだと推察される。この検討は今後なされていく必要があると考える。

また、上記の課題検討のためには、さらに大きなサンプルサイズでの中高校生を対象に調査する必要があると思われる。さらに、進学校ではない高校生徒との比較も必要と考え、大学生や成人者、中高生を対象とした研究を実施し、発達の異同を検討することも今後の課題である。

## 付記

この論文を作成するにあたり、多くの方々から多大なご協力、ならびにご指導、ご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

調査実施のために貴重な時間を割いて協力して下さった私立X中学校および、私立X高等学校の皆様にご心より感謝申し上げます。

## 文献

- 新井千世(2011). 女性は本当に成功回避しているか?—成功回避概念の再検討及びジェンダーとの関連—. 跡見学園女子大学大学院人文科学研究科修士論文(未公開).
- Horner, M. S. (1969). A bright woman is caught in a double bind. —In achieve-

- ment-oriented situations—She worries not only about failure but also about success. *Psychology Today*, 36-62.
- Horner, M. S. (1972). Toward an understanding of achievement-related conflicts in women. *Journal of Social Issues*, **28**, 2.
- 岡本直子(1999). 親密な他者の存在と成功恐怖の関係について. *教育心理学研究*, **47**, 199-208.
- 柴田恵子(2018). 女性勤労者の女性役割ストレスの検討—女性役割ストレス尺度作成と女性役割ストレスの属性による際の検討—. *Journal of Health Psychology Research*. 30 (Special\_issue), 133-141.
- 篠崎恵(2015). 現代の女子学生における潜在的キャリア意識に関する研究—女性の人生課題(結婚と育児)を背景として—. 跡見学園女子大学大学院人文科学研究科修士論文(未公刊).
- 田坂明子(2002). 別学および共学女子高校生の自己概念に関する研究. *日本青年心理学会大会発表論文集*, **10**(0), 50-51.
- 渡邊寛(2017). 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証. *心理学研究*, **88**(5), 488-498.